



■キャリア支援特集

一人ひとりに寄り添う キャリアデザインを

—関西大学で描く「なりたい自分」—

■キャリア支援特集 — 1

■リーダーズ・ナウ — 7

卒業生 — 川崎重工業株式会社 梶谷 圭太 さん
在学生 — 社会学部4年次生 山本 菜子美 さん
文学部3年次生 須田 啓太 さん

■研究最前線 / Research Front Line
コミュニケーションの視点で人間関係や社会を研究
世代や人種を超えた

「対話」や「議論」を保つには — 11
外国語学部 — 田島 慎朗 准教授

• Maintaining “Dialogue” and “Debate” Across
Different Cultures
Faculty of Foreign Language Studies
— Associate Professor Noriaki Tajima

■トピックス [学内情報] — 15

関西大学協賛の「大阪マラソン2024」開催
関大ランナーやボランティア、
約500人が大活躍 ほか

■社会貢献・連携事業 — 16

社会安全学部・社会安全研究科の学生が
「被災高齢者等把握事業」で被災地へ
令和6年能登半島地震「誰も取り残さない
被災者サポートプロジェクト」に参加 ほか

■関大ニュース — 19

SDGsを考えるきっかけに。
ギフトで学生を応援 ほか

■キャリア支援特集



一人ひとりに寄り添う キャリアデザインを

— 関西大学で描く「なりたい自分」 —

大学生の最大の関心事の一つ、「卒業後の進路」。新たな技術革新や価値観の多様化により、社会が目まぐるしく変革し、少し先の未来でさえ不確実で予測困難な状況の中で、早い段階から自身のキャリアを描いていく機会をつくり、確かな力を身につけ、アップデートし続けていける人材に成長することが大切です。

関西大学では、社会の課題解決に向けて考え、行動することができる「考動力」と、新たな価値を創造し、多様性を生み出すことのできる「革新力」を育成しています。学生たちがキャリアの開発を主体的に捉え、行動を起こす力(=キャリアオーナーシップ)と、社会における自身の役割を見出し、周囲に価値を届ける力(=ジョブオーナーシップ)を育めるように、早くから社会の一員として活躍することを意識し、大学生活をアップデートできる機会を提供しています。

目標に向かって挑戦するための 基礎体力を育む学生生活を

3月1日、2025年春に卒業予定の大学生・大学院生を対象とした採用広報解禁され、就職活動が本格的に始まりました。各業界での人手不足に加え、コロナ禍で落ち込んでいた企業の採用意欲は、製造業でも非製造業でも概ね回復しており、学生にとって有利な「売り手市場」の傾向は当面続く予想されます。

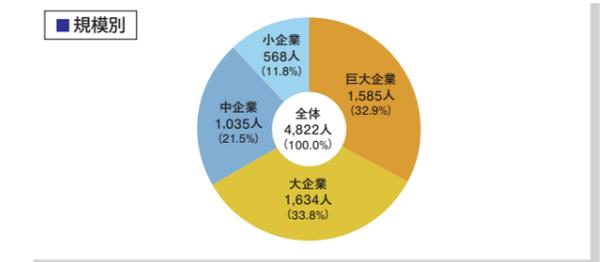
しかし、一方で安易な進路選択により、採用する側と採用される側の十分な相互理解がないまま、残念ながらミスマッチを引き起こしてしまうことも想定されます。

キャリアセンターでは、早期の段階で自身の将来を主体的に見据え、自らの進路・将来を定めるキャリアデザインの実現に必要な能力を高めるために、いわゆる「就職活動」の支援にとどまらず、1年次生から参加できるガイダンスやさまざまなプログラムを数多く用意しています。

例えば、自由に活用できるWebツール「関大版ハタチのトビラ」は、学生が将来を考える上で出てくるさまざまな悩みを解決することに、また、正課内外の活動結果や成果等のいわゆる「ガクチカ」をまとめて記録・保管できる「キャリア支援専用ポートフォリオ」は自己分析や適性判断に活用することができます。

さらに、就職活動の段階では、各種対策講座や業界研究・企業研究セミナー、学力試験対策、OB・OG懇談会等の提供にとどまらず、キャリアに関する専門知識や実績を持つ相談員やスタッフが年間を通じてFace to Faceで学生との個別相談に対応する等の支援をしています。

2023年3月卒業生の就職状況を振り返ると、本学学生の就職率は98.5%（理工系3学部は99.9%）で前年度と比べて0.2ポイント上昇しました。規模別状況では、巨大・大企業への就職率が合計で66.7%、中企業は21.5%、小企業は11.8%となりました*。

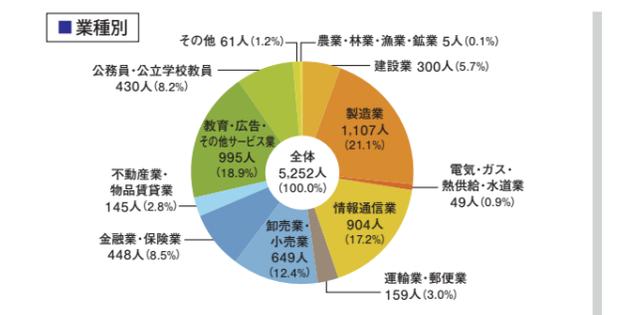


*巨大企業=従業員3,000人以上 大企業=従業員2,999人~500人
中企業=従業員499人~100人 小企業=従業員99人以下

●キャリアセンター所長
平野 義明



業種別状況で見ると、製造業、情報通信業、卸売業・小売業への就職率が約半数を占めています。前年度と比べて、製造業の割合が増加し、反対に、教育・広告・その他サービス業の割合が減少しました。



この2月、本学初の卒業生調査の結果が公表されました。調査項目のうち、「仕事やキャリアに対する満足度」や「ウェルビーイング(より良く生きられている実感)」について、平均値に着目すると、現在の仕事やこれまでのキャリアに満足し、成長意欲が高い傾向にある一方、仕事に必要なスキルを自主的に学ぶこと、社会的評価よりも自分の価値観を優先することや常に目標を持ち続けることについては低い傾向にあり、社会に出てから学びを続けることや自分軸を形成することの困難さがうかがえました。

不確実で予測困難なVUCA時代の到来とともに、安定したルールにさえ乗れば安泰という時代ではなくなりました。新たな価値観によって大きく変貌する社会を進むために、膨大な情報から「本当に必要なもの」を選び取る力を養えるかどうか、それは学生時代をいかに能動的に、有意義に過ごせるか、つまり自分自身の意識にかかっています。キャリアデザインは社会に出るまでだけではなく、むしろ社会に出てからこそ必要となるものです。キャリアセンターは、学生のうちに自身のキャリアを常にアップデートしていける基礎体力を身につけられるよう、今後も支援を続けてまいります。

Career Design

■キャリア支援特集

キャリアデザインで 充実の学生生活を



◀ 関西大学キャリアセンター ▶

「キャリアデザインとは？」を考える

●キャリア教育科目群

共通教養科目の一つに「キャリア形成科目群」を設置し、自身のワークキャリアとライフキャリアをデザインしていく科目を開講。他の共通教養科目群で身につけた総合知や学部の専門教育科目で身につけた専門知を長期的な視野でキャリアデザインへ展開していくプロセスを学ぶことで、大学で学ぶ意味を明確にします。

授業では、文章表現やワークシート、グループワークを交え、自己と社会に対する理解を深めながら、両者の関わりを考察し、学生が自らの将来を考える機会を提供します。

キャリア形成科目群 開講科目 (2024年度予定)

- ◆大学生から始めるキャリア形成
- ◆現代社会を生き抜くためのキャリア形成
- ◆キャリア形成入門演習
- ◆キャリア形成実践演習
- ◆理論と実践から探求するキャリア形成
- ◆インターンシップ(ビジネス) ◆インターンシップ(学校1)
- ◆インターンシップ(学校2) ◆インターンシップ(学校3)



●キャリアデザインブック

キャリアデザインの入門書として、キャリアデザインの進め方だけでなく、充実した学生生活を送るために、関西大学が提供する支援やプログラムを紹介。企業への就職だけでなく、公務員や教員になるためのプロセスや大学院進学に関する情報も提供しています。

●学部の学びの特徴に合わせた行事

理工系学部生は就職だけではなく、大学院進学も多いため、それらも視野に入れた進路選択が必要です。そこで、現場見学や理工系職種への解説をはじめ、理工系学部の卒業生のお話を聞く「KANDAI FAMILY 講座」を実施。

また、千里山キャンパス以外に、高槻・高槻ミュージズ・堺キャンパスでは、学部の特徴に合わせて、ITや安全・安心を支える業界に特化したセミナーや、スポーツや福祉コース学生の就職活動を支援する独自行事を展開しています。

関西大学のオリジナル支援ツール — 就職活動をする関大生の必需品 —

●KICSS (関西大学インターネットキャリア支援システム)

就職活動をする関大生に欠かせないKICSS。約32,000件の企業・公共団体の企業情報や求人情報がデータベース化されているほか、キャリアセンター主催行事の案内や関西大学独自の採用情報から国家試験や各種資格に関する情報まで常時発信しています。



●関西大学キャリア支援専用ポートフォリオ

日々の学修や活動をポートフォリオとして記録・保管し、自身の進路選択に役立てることができます。また、適性試験や性格診断、業界研究や職種研究などに役立つWebサイトやポートフォリオをもとに自己PRやガクチカのアウトプットに便利な「OpenES」等にもリンクしています。



●Career Support Book

履歴書の書き方やビジネスマナーだけではなく、自己分析や書類作成、業界研究等の就職活動に必要な情報に加え、スケジュール帳までも兼ね備えた1冊を学生に配付しています。

1~2年次 自分を磨き、キャリアデザインを始めよう



自らの知識を増やし、スキルを磨きながら仕事や社会について学びます。また「なりたいたい自分」を見つけ、そのための準備をします(=キャリアデザイン)。

(詳細はコチラ)

社会と出会い、社会人基礎力を育む

●企業連携型キャリアスタートプログラム



各業界をリードする企業と連携した体系的な通年のプログラムを提供。連携企業の社員との対話や実践ワーク、産学連携によるPBLプログラム等を通じて社会で働くことのリアルに触れ、学部で専門性を磨くことの意義を明確にするとともに、社会で求められる変化適応力や自己探求力を養います。

連携企業 (2024年度予定) (50音順)

NTT西日本/コクヨ/ダイハツ工業/TOPPAN/ロッテ/ワコール

〈VOICE：学生の声〉 桑原 萌映さん (経済学部3年次生)

コロナ禍でスタートした大学生生活。2年次は何かかに挑戦したいと思って、友人とはなく一人での参加を決めました。前期プログラムで基本的なスキルを磨いた後、後期プログラムで取り組んだ「アパレル店舗の新企画提案」では、約3か月の間、チーム5人で意見を出し合い、取りまとめ、実際に企業の方の前でプレゼンをしました。その後のフィードバックでは新しい気付きや今後のヒントもあり、一足先に社会に出ることを実感できたのは貴重な経験でした。



●関大版ハタチのトビラ

大学生生活を充実したものにしたいたいと思いつつ、何から手を付ければいいのか分からない……そんな学生のために、先輩学生や教員、企業等で活躍するOB・OGらによる動画を通して、社会や自分を知り、将来の選択肢を広げるWebツールを準備。自身の興味・関心をもとに「マイテーマ」を設定し、自身の軸が簡単に言語化できるツールです。

(詳細はコチラ)



3年次 就活に向けて準備をしよう 働く世界を知ろう

インターンシップ等への参加、各種講座の受講、OB・OGとの交流を通じて、本格的な就職活動の準備・対策を進めていきます。



●就業体験・インターンシップ

関西大学では1年次生から参加できる就業体験・インターンシップのプログラムを提供しています。より高い教育効果を発揮できるよう、働くこと、社会の一員になることの意味や基本的な礼儀作法を学ぶ事前講座と、就業体験・インターンシップを振り返り、今後の進路選択や就職活動への生かし方を学ぶ事後講座を実施し、質的な充実を図っています。

実施プログラム (2023年度実績)

- ①KU協定型就業体験プログラム(夏季休業期間中実施)
- ②学外公募就業体験・インターンシップ ③学校インターンシップ
- ④学芸員インターンシップ ⑤監査法人インターンシップ
- ⑥アドバンスドインターンシップ ⑦知財インターンシップ
- ⑧法科大学院エクスターンシップ

〈VOICE：学生の声〉 郷緒 祐助さん (社会学部3年次生)

3年次の4月にキャリアセンターの就職ガイダンスに参加したことで、就職活動前にいろいろな業界を見たいと思い、3年次の夏休みに不動産、食品、金融等9社の就業体験・インターンシップに参加しました。そこで感じたのは、イメージと実際の違い。例えば、一言で営業と言っても、業界ごとに特色があります。実際に業務の内容や社員の方のお話等に触れたことで、自身の適性や関心のある業界を具体的にイメージすることに繋がり、就職活動に前向きに取り組むことができています。

●OB・OG懇談会

2020年度、各方面で活躍する卒業生によるキャリア支援組織として「関西大学キャリアアドバイザーネットワーク(KU-CAN)」を設立。約60人(2024年3月現在の)卒業生から、セミナー等では語られない企業や仕事の醍醐味や自身が同僚として一緒に働きたいと考える人物像などが聞ける機会を年に数回提供しています。



4年次 進路を決めよう

各種支援プログラムや、セミナーなどに参加しながら、一人ひとりに合った進路をめざします。



●キャリアサポーター

就職活動を終えた4年次生がキャリアサポーターとして、キャリアセンターと連携し、後輩の就職活動を支援しています。就職活動経験者ならではの目線で、学内イベントや個別相談会で自らの実体験や具体的なノウハウをアドバイスします。



早期から計画的な準備が必要な 進路の支援

公務員 公務員は、国家公務員と地方公務員に大別され、どちらも職種や業務内容によって仕事内容だけではなく、採用試験や試験時期にも違いがあります。このため、早期から公務員の仕事を知り、しっかりと志望理由と目的意識を持って準備を進めることが重要です。

キャリアセンターでは、公務員に関心のある1・2年次生対象に「公務員基礎講座」を提供。全学年対象としては「公務員セミナー」「公務員採用試験・業務説明会」等を開催することで、近年、人物重視が高まっている公務員採用試験に対応できるよう支援しています。

公務員就職状況 (2022年度実績)

国家公務員 95人 / 地方公務員 249人

教員 関西大学では小学校・中学校・高等学校の教員免許を取得することができます(免許の種類・校種・教科は、学部・研究科で異なります)。将来、教員になるためには、教員免許の取得に必要な科目を1年次から計画的に履修することに加え、早期から教員採用試験受験のための準備が必要になります。

教職支援センターでは、教員養成から就業支援までを一括して行う拠点として、実務経験豊富なアドバイザーや事務スタッフが、教員をめざすみなさんの相談に応じています。

教員採用状況 (2022年度実績)

公立学校 60人 / 私立学校 18人

■キャリア支援特集

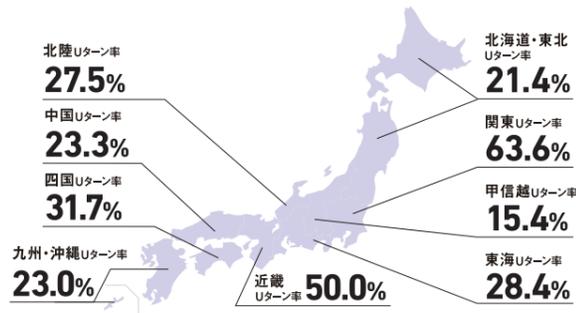
学生の希望や状況に合わせた支援

U・Iターン就職 — 住み慣れた地元や住みたい地域で活躍したい! —

全国から学生が集まる関西大学では、住み慣れた地元や住みたい地域での就職を希望する学生のために、現在21府県(2024年3月現在)と協定を締結し、関西圏から離れた地域での情報を収集し、提供しています。

U・Iターン就職は、全国規模で採用活動を展開している企業に比べ、採用情報が少なく、特にUターン就職は、希望する学生だけでなく、地元で暮らす父母にとっても、動向や状況が気になります。そこで、父母が実際にキャンパスに来るタイミングや大学関係者がキャンパス外に出向く懇談会を活用し、キャリアセンター職員や地元地方自治体等の団体等が個別相談ブースで対応しています。

■エリア別Uターン就職状況(2020年~2022年過去3年間の実績)



就職に関する協定締結府県(自治体)(締結順)

広島県/徳島県/香川県/高知県/愛媛県/鳥取県/岡山県/山口県
石川県/熊本県/三重県/福井県/島根県/静岡県/岐阜県/愛知県
和歌山県/京都府/福岡県/富山県/宮城県

父母対象行事(2023年度実績)

- 5月……教育後援会総会(千里山キャンパス)
- 6~11月……地方教育懇談会(全国16都市)
- 10月……就職説明懇談会(3年次生父母対象)(千里山キャンパス)
キャリアデザインセミナー(1年次生父母対象)(千里山キャンパス)
- 12月……キャリアプランニングセミナー(2年次生父母対象)(千里山キャンパス)

留学生就職支援コンソーシアムSUCCESS

— 日本で就職活動する留学生の強い味方 —

留学生就職支援コンソーシアムSUCCESSは、「キャリア教育」「ビジネス日本語教育」「インターンシップ」を柱とした各種支援により、産官学による高度外国人材の育成と国内企業における定着促進に取り組み、日本社会のDE&I促進にも寄与することを目指しています。現在、全国18の国公私立大学会員と賛助会員5機関が参画し、関西大学国際部が事務局運営を担っています。会員大学の留学生を対象に、日本での就職に必要なスキル(異文化間コミュニケーション力、計画・調査力、自己管理能力等)を習得するための多様な支援メニューを提供しており、関西大学で学ぶ留学生も活用しています。留学生が企業から内定を得ることだけを目的とするのではなく、日本社会で長期的に活躍できることを視野に入れた支援をしています。



企業説明会の様子



(詳細はコチラ)

支援メニュー(2023年度実績)

- 就職支援集中講座 ●SDGsから考えるビジネスプランニング講座
- ビジネス日本語(BJT)セミナー ●オリジナルインターンシップ
- Future Design Project
- 地方自治体及び賛助会員等との連携による講座、セミナー他

エクステンションリードセンター

— 各種資格や難関国家試験に挑戦する学生を支援 —

これからの時代に、より一層必要とされる自律的なキャリア形成を支援するために、大学構内に設置されたエクステンションリードセンターでは、各種資格や難関国家試験に挑戦するための対策講座を開講し、学生を支援しています。所属学部や研究科の枠を超え、通いやすい対面形式や利便性の高いオンライン形式等、効率的で教育効果の高い形態の講座を関大生向けの受講料で提供しています。関西大学の学年暦に配慮した時間割の設定、オフィスアワー等の充実した学習サポート、同じ目標を持つ関大生同士のつながりが学生の学習意欲の向上につながっています。

(詳細はコチラ)



開講講座(2023年度実績)

- 各種英語講座 ●公務員講座 ●デジタル関連講座
- 簿記・会計系講座 ●各種資格取得対策・スキルアップ講座



〈VOICE: 学生の声〉 吉田 彩乃さん(商学部2年次生)

将来、留学するにも、就職するにも英語力は必要だと思い、TOEICの講座を受講しました。講座では発音やペアワークもあり、効率的に4技能を鍛えることができました。TOEICは自身の英語力をスコアで知ることができ、苦手分野の把握と克服に役立ちました。また、講座外でも、講座で教わった表現や単語を意識して使い、少しずつ表現できる幅を広げるよう心がけました。大学卒業後は観光に携わる公的な機関で自身の英語力を発揮したいと考えていますので、さらにスコアアップをめざして、学習を続けています。

起業というキャリアも視野に

働き方はまさに生き方とも言えます。価値観が多様化する中で、関西大学ではスタートアップ支援やアントレプレナーシップ(起業家精神)を醸成する機会を提供し、起業家もしくは起業家のように考動する人材の育成にも取り組んでいます。

授業では、共通教養科目の関西大学科目群で所属学部の枠を超えて「起業に学ぶ「考動力」入門(関大出身起業家と考える未来の自分)」や「起業に学ぶ「考動力」実践(企業と考える未来のデザイン)」を開講しています。また、一般社団法人ベンチャー型事業承継と連携し、実家が家業を営む学生を対象に、家業の経営資源で開発する新規事業について学ぶ「ビジネス研究(次世代の後継者のための経営学)」を開講。2019年度からは「大学コンソーシアム大阪」の提供科目として、大学の枠を超えて、大阪府下40大学の学生に受講されています。

また、関西大学の大学昇格100年を機に、2022年度に「関西

大学山岡塾」を創設。塾では、社会的課題の解決に向けて、教職員や校友等から専門的な助言を得ながら、チームで実践的に取り組んでいます。

そして、イノベーション創生センターでは学生対象のアントレプレナーシップ醸成イベントや起業に関する勉強会等の取組みを、さらに、関西大学梅田キャンパスでは、志ある起業家を輩出することを企図した起業プログラム「HACK-Academy」を実施。最前線で活躍する起業家や新規事業担当者がメンターとなり、学生の起業目的の明確化からビジネスモデルの構築、サービスをローンチするまでのサポートを行う本格的なプログラムを展開しています。

STEP1: 目的の明確化

起業マインドの醸成 何をしたいのか? なぜ起業するのか? → まずは疑問を解決するところから始めます

●スタートアップカフェ大阪

起業支援経験の豊富なコーディネーターが起業相談に応じるとともに意識を喚起するイベントを定期的に開催しています。

●イノベーターズトーク

ビジネスの第一線で活躍中の若手起業家と学生とが交流できるトークイベントを開催し、起業マインドを醸成します。

●企業見学会

先進的な取組みや事業を展開する企業を訪問、見学し、会社関係者と社内起業や新規事業の立ち上げ等についてディスカッションします。

●Mission Lounge

起業や新しいことに関心のある学生が集まるイノベーション創生センター公認学生コミュニティ。80人を超える学生が登録し、情報交換の場となっています。

●HACK-Academy

自分の実現したいことを内省化し、ビジネスの土台となる志や想いを形づくらします。

▶その他にも、スタートアップ企業へのインターン促進、海外企業プログラム実施、KU-CICニュースレターの発行 等

STEP2: ビジネスモデルの検討

シーズの価値評価 誰を対象に何を提供するのか? 事業として継続できるのか? → 社会的ニーズやビジネス性の調査とコンテストで腕試し!

●HACK-Academy イノベーション・キャンプ

実際に事業を開始するにあたり、顧客ニーズの深堀りからビジネスとしての有用性を検討します。起業家や事業開発の専門家がメンターとなり、事業開発を支援します。

●ビジネスアイデアコンテスト「SFinX」

関西大学理工系の研究成果をテーマに、所属学部・研究科の枠を超えて、学生が事業化に向けたビジネスアイデアを競います。

▶その他にも、アイデアソン・ハッカソンへの参加、起業家等によるメンタリング 等

STEP3: 事業計画の具体化

事業計画の立案 仕入れや生産ラインは? 組織構成や財務計画は? 資金の調達 自己資金や外部資金はどうする?

●HACK-Academy インキュベーションプログラム

事業開発を専門とするパートナー企業と連携して事業化を加速すべく、事業計画書の作成からサービス開発まで学生のスピード感に合わせたサポートを行っています。

●関西大学起業資金支援制度

学生や専任教員が立ち上げるベンチャー企業を対象に起業時の必要資金等を支援するため関西大学独自の制度を整えています。

▶その他、土業や専門家による個別相談 等

▶その他、ベンチャーキャピタルや連携金融機関の紹介 等

STEP4: 創業・事業の本格稼働

黒字化をめざす 商材のPRと販路の開拓や拡大が収益につながる仕組みをつくります

▶レンタルオフィススペースの提供、関西大学出身起業家交流会の開催、協力企業・団体のサポート 等

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]



いつもワクワク することを大切に

思い悩んだ時こそチャンス

●川崎重工業株式会社
梶谷 圭太 さん —経済学部 2016年卒業—

「人の懐に入るのがうまいとよく言われます」。屈託なく笑う梶谷圭太さんは、日々やりがいを感じている。大手だからこそスケールの大きな仕事。そんな夢を叶えるまでには、自身の才能やキャラクターだけでは計れない、努力の軌跡があった。

●恩返しがたくて指導者に

小学校から熱中していたサッカー。「母に『高校でサッカーを続けるなら私学がいいんじゃない』と勧められて」、強豪の関西大学第一高等学校へ。80人以上を擁する部にあって、試合には出たり出られなかったり。2年連続で全国大会に出場したものの、自分たちの代では途絶えた。「悔しかったですね。でも、充実した3年間でした。部の『真面目に謙虚に』という教えは今も息づいています」。

関西大学に入学後、サッカーは体育会ではなく、サークルを選んだ。「大学では部活動以外のことも経験したいという思いがありました」。まず、アルバイトで自身が所属していたキッズスクールの指導者になった。



▲大学時代所属のサッカーサークルでは全国大会出場を果たした

「指導者に興味があったのと、当時の恩返しがたくて、私の方からお願いしました」。週2回の練習や土日の試合、合宿にも付き添い、気付けば「大学4年間ずっと続けていました(笑)」。

●交流が広がったオーストラリア留学

サークルもアルバイトも楽しかった。ただ、2年次に差し掛かった頃、「今しかない大学生活を自分は本当に満喫しているといえるのか」という思いが頭をよぎった。「勉強して、サッカーをして、アルバイトをして。友人と過ごす日々はもちろん楽しいが、毎日と同じ繰り返しでいいのか」と自問した。そして一つの答えを出す。「そうだ！留学しよう！」。大学の認定留学制度を利用して2年次生の10月から半年間オーストラリアへ。「英語に自信はないけれど、とにかくたくさん友達をつくらうと意気込んで行きました」。

アデレードという町で英語を学びながら、臆することなく人に声をかけた。その時に力を発揮したのはサッカーだ。「街中でボールを蹴っている人たちに『混ぜてよ』と言って輪に入っていました」。そんなある日、加わったチームでの初戦、2ゴールアシストの活躍を果たし、そのままチームに所属することになった。



1.オーストラリア留学時のフェアウェルパーティ
2.卒業式でゼミの同期生たちと記念撮影
3.卒業後にゼミの恩師・北原先生の誕生日に集ったゼミの仲間たちと
4.環境プラントのクレーンの前で
5.梶谷さんがプロジェクトに携わった環境プラント

留学期間も終盤に差し掛かった頃、「このままこのチームに残らないかと誘われたんです」。心は揺れたが、ゼミの先生の「圭太はサッカー選手になるために留学したの？」という言葉に帰国を選択。オーストラリア、ブラジル、カザフスタンなど、今なお交流のある外国の友達との絆をたくさん抱えて、日本に帰ってきた。

●仕事のプレッシャーをロサンゼルスで体験

帰国すると、就職活動を意識する3年次になろうとする頃だったが、梶谷さんは学内の国際インターンシップの募集ポスターを見て、「ダメ元」で応募した。結果は合格。「40日間ロサンゼルスに行き、広告会社で働きました」。フリーペーパー制作に携わり、店舗の取材などを経験した。上司からの指示や締め切りなど、アルバイトやサッカーとは種類の異なるプレッシャーを体感できたのは財産になった。

日本に戻ると、就職活動は本格化していた。大学のキャリアセンターの職員に相談しながら、スケールの大きなモノづくりに挑める会社を中心にエントリーしていった。川崎重工業に惹かれたのは、キャリアセンター主催の就職セミナーがきっかけ。「担当者の方が、本当に楽しそうに自社の仕事について話してくれた」。カワサキ=バイクメーカーほどの知識しかなかったが、世界中のインフラをつくる会社だと知り、ワクワクした。

●数百億円プロジェクトに挑む

「内定は、アレのおかげかもしれません」。川崎重工業が当初初めて実施した2泊3日のインターンシップ。周りは優秀そうな学生ばかりのなか、「ここで目立って、爪あとを残す」と決めていた。誰かれなく積極的に話しかけ、課題では誰よりも駆け回った。全日程を終えての報告会では、皆がマイクを手に発表するなか、「僕、声が大きいのでマイクなくても聞こえますよね！」の第一声で会場を沸かせた。終始笑いを織り交ぜたプレゼンは関係者の目を引き、話題になったという。

あれから9年が経過し、梶谷さんは川崎重工業の営業部門で環境プラント、特にごみ焼却施設の建設に携わっている。今や単にごみを燃やすだけではなく、地域への電力供給や環境情報発信の場となっているごみ焼却施設。建設だけではなく維持管理運営まで担うため、その地域に付加価値をもたらす施設への提案を行い実現してきた。「良い提案をするためにその地域にひたすら通い

続け、地域の幅広い業種のステークホルダーを巻き込みながら仕事を進めていきます」。大きさではなく地域の情報を徹底的に収集し、自治体に向けて自社商材とサービスの特長をアピール。数百億円規模の環境プラントの施工を実現させてきた。「これまででは上司や先輩のサポート役でしたが、今後は自分が主担当となりプロジェクトを進めていきたいです」。

●視野と可能性を広げる体験を

仕事の傍ら、梶谷さんは母校・関西大学のある活動に参加している。関大の卒業生で構成される「関西大学キャリアアドバイザーネットワーク(KU-CAN)※」に登録し、OBとして現役関大生のキャリア支援に携わっているのだ。「キャリアセンターからの依頼を受けて、KU-CANができる以前から、OBOG懇談会などで学生に向けて自社の魅力や働くことについてお話をさせてもらっています。私自身もこのような機会のおかげで今ここにいる人間なので。やりがいや生きがいに出会えたチャンスに感謝し、「恩返しをしている」と話す。後輩たちに伝えたいのは「視野を広げること」。「知っている会社から選択するのではなく、いろいろな会社を見て、知る機会を増やしてほしいですね」。サッカー、留学、インターンシップ。さまざまな活動と体験を通じて自らの視野と可能性を広げてきた梶谷さんならではの金言だ。

※関西大学の卒業生から構成されるキャリア支援ネットワーク組織。キャリアセンターと卒業生との連携により、現役学生へ持続性のある充実した独自支援体制を構築すべく、現在約60人のメンバーが在籍している。



梶谷 圭太—かじたに けいた
■1993年大阪府生まれ。2012年関西大学第一高等学校卒業、2016年関西大学経済学部卒業。同年より川崎重工業株式会社に入社。2024年2月現在、エネルギーソリューション&マリンカンパニーに所属し、環境プラントの建設事業等に携わっている。

LEADERS NOW!



せっかくするなら 楽しんだ方がいい!

就活する後輩をバックアップ

●社会学部4年次生
山本 菜子美さん

大学入学時から自身のキャリアデザインを考え、満足のいく就職活動を終えた山本さん。現在は、自分の経験を活かして後輩たちにアドバイスをするキャリアサポーターとして活躍している。大学生活のなかで社会を見据えつつ、就職活動の準備を進めたことから見いだした「就職活動の楽しさ」とは?

山本 菜子美—やまもと なごみ
■2001年広島県生まれ。広島市立基町高等学校卒。関西大学社会学部2年次生で「キャリアスタートプログラム」に参加。30社近いインターンシップ経験と積極的な就職活動で、地元・広島に在籍。現在は後輩たちの就職活動をバックアップする「キャリアサポーター」として、講演会やイベントの企画運営など積極的に活動を行っている。



1. 就職活動の体験談を講演 2. 後輩の就活生たちへアドバイス 3. 企業からの課題についてのプレゼンで優勝。チームリーダーとして表彰を受ける様子

就職活動を終えた山本さんはキャリアサポーター、通称「キャリアサポ」として、これから就職活動を始め、また就職活動中の後輩に向け、自身の経験を踏まえてアドバイスやサポートを行っている。

個別相談の他に、2年次父母・保護者を対象にした「キャリアプランニングセミナー」や広島で開催された「地方教育懇談会」といった行事で就職活動時の体験談を講演。またイベントなども企画し、「面接で聞かれる質問ランキング+ワンポイントアドバイス」「面接直前・前日のチェックポイント」など、いずれも就活生のニーズに寄り添った内容を企画した。

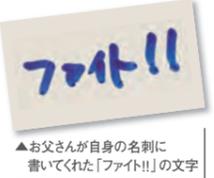
「色々な事例を具体的に紹介したり、直接アドバイスもしました。個別相談で『お話を聞けて良かったです』と言ってもらえることもあり、サポートする側になってみて自分の経験が次の世代ともいえる後輩たちの役に立っていることを実感できてやりがいがあります。」

最後に後輩たちへのメッセージを聞いた。「伝えたいのは『自分らしく楽しんで就活しよう』ということ。私は就活のための就活ではなく、自分や社会の将来のために、こんな価値を届けたい、と内定の先の実際に働くことを考えて活動したから、楽しく集中して頑張れました。皆さんにも自分を素直に表現しながら希望の進路に向かってほしいです。」

「大学受験の次の目標は就職活動。入学した当時はコロナ禍だったんですが、十分な準備をしたいと考えていました」という山本さんが参加したのは『企業連携型キャリアスタートプログラム』。働くことについての価値観や就職活動の心構えを学び、企業から出された課題についてチームで取り組むキャリアセンター主催のプログラムだ。山本さんはチームリーダーとなって文具メーカーからの「大学生の新しい学び方を実現するプロダクト」の商品企画について仲間と取り組んだ。

「みんなで夢中になってアイデアを出し合い、あれこれ意見を交換した時間は貴重だったし、チームごとのプレゼンで優勝できたことが本当に励みになった」。自身の就職活動ではガクチカの一つとしてこの経験を挙げた。

地元に関わり立つ仕事に就きたいという想いから、エントリーしたのはすべて地元・広島が拠点の企業。その一つは、山本さんのお父さんが働く会社だった。「父が誇りを持って働く姿をずっと見ていたし、子供の頃から『同じ会社で働けたらいいな』と思っていたんです」。



▲お父さんが自身の名刺に書いてくれた「ファイト!!」の文字

最終面接の際には、自分の名刺に「ファイト!!」の文字を書いてお守り代わりに渡してくれたというお父さん。内定を受けた際は自分ごとのように喜び「頑張ろうね」とメールを送ってくれたことに山本さんの喜びもひとしおだった。

2年次の秋頃からインターンシップに参加し始め、内定が出たのは4年次の6月。その就職活動期間を振り返ると「楽しかった」の一言に尽きるのだそう。社会人の価値観や考え方を聞いたことや、知らないことに新しく触れたことは新鮮な経験として心に残っている。

今年はダントツで 須田やったな

チームでも日本一を目標に

●文学部3年次生
須田 啓太さん

関西大学体育会アメリカンフットボール部は、2023年のリーグ戦で13年ぶり7度目の優勝を飾った。だが、3大学が同率で優勝した結果、規定により抽選で、惜しくも学生日本一を決める「甲子園ボウル」の出場を逃した。個人では年間最優秀選手に選ばれた須田啓太さんは「チームの日本一が第一。今年こそは」と決意を新たにしている。



▲学生アメリカンフットボールの年間最優秀選手に与えられるミルス杯を受賞した須田さん

剣道選手の両親のもと、幼いころから高い運動能力に恵まれた。野球をすれば身体能力が必要な投手や遊撃手を任された。転機は小学5年生。地元の体験会でアメフトの存在を知った。「最初はラグビーとの違いも分からなくて……『防具が格好いいな』と思う程度だったんですが、次第に頭と体を高いレベルで使う競技そのものに魅力を感じるようになりました」。中学校では部活で軟式野球、校外のクラブチームでアメフトと「二刀流」を実践していたが、「もっとアメフトが上手になりたい」と思い、高校からアメフト一本に絞ることを決めた。

中学生の時は全国的には無名の選手だったと言う須田さん。当時の関西大学第一高等学校アメリカンフットボール部の磯和雅敏監督(現・関西大学アメリカンフットボール部監督)から「一高でやってみないか」と誘いを受けた。「活躍もしていないのに声を掛けてくれたことを恩義に感じた」と言い、関西大学で学生日本一を目指す物語が始まった。

才能は高校入学後に花開く。攻撃の起点となるQB(クォーターバック)に必要な長距離を投げきる肩の力、自らボールを持って走る足の速さ。そんな「パス」と「ラン」どちらの能力も兼ね備えた万能選手として、チームの主力を担った。大学入学後は1年次から試合に出場し、「期待の若手」として取り上げられることが増えた。

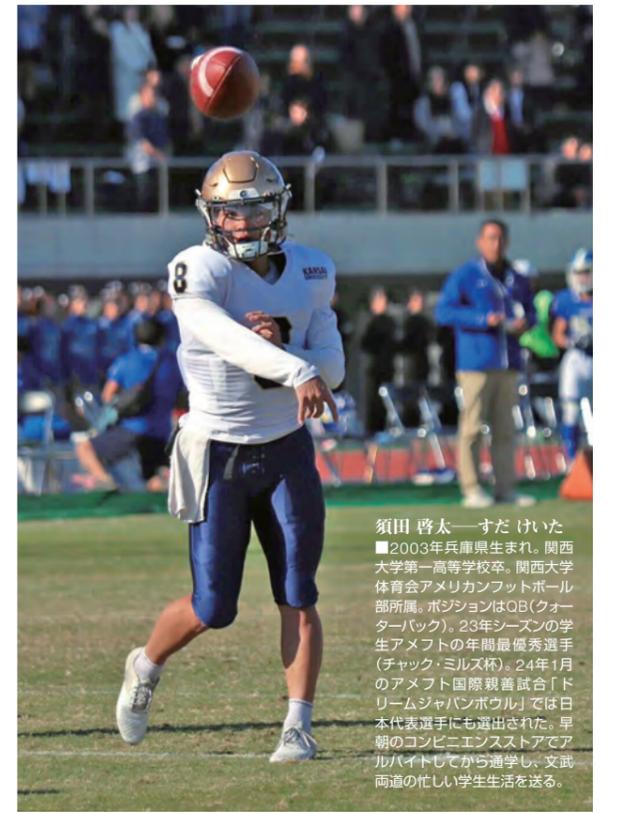
2年次に不動のQBとなると、3年次には走りながらパスを出すランニングスローの精度を高め、学生アメフト界で注目の存在に。自らを人見知りな性格と分析するが、「不思議なことに、アメフトのことで気になったことは誰にでも聞けるんですよ」と笑う。それがライバル大学のエースだろうと、高校で同じくQBを務める弟の隆介さんであろうと。「僕はプレーに気持ちを乗せるのは



得意でも、クレバーさはイマイチ。その点、弟は試合中も冷静なので参考になります。何でも吸収しようという貪欲さが、彼の成長を後押ししている。

「僕は出会う人に恵まれてきました。先輩、コーチ、監督、みんなが真剣に僕に向き合ってくれた。支えてくれる家族の存在も大きい。1月に日本代表選手として出場した国際親善試合には家族総出で東京まで応援に来てくれた。「感謝しています。だからこそ、結果で恩返しをしないと」。そのためにもっと結果にこだわる1年にするつもりだ。

学生ラストイヤーに目指すのは日本一。そして「今年はダントツで須田やったなと言われたい」と宣言する。社会人・Xリーグで日本のアメフト界を引っ張るという夢を実現する前に、まずは学生アメフトで全力を出し切るつもりだ。



須田 啓太—すだ けいた
■2003年兵庫県生まれ。関西大学第一高等学校卒。関西大学体育会アメリカンフットボール部所属。ポジションはQB(クォーターバック)。23年シーズンの学生アメフトの年間最優秀選手(チャック・ミルス杯)。24年1月のアメフト国際親善試合「ドリームジャパンボウル」では日本代表選手にも選出された。早期のコンビニエンスストアでアルバイトしてから通学し、文武両道の忙しい学生生活を送る。

■研究最前線

コミュニケーションの視点で人間関係や社会を研究 • Studying human relationships and society from a communication perspective

世代や人種を超えた「対話」や「議論」を保つには

—相互理解のためのコミュニケーション学—

Maintaining “Dialogue” and “Debate” Across Different Cultures

—Communication Studies for Mutual Understanding—

◎外国語学部 田島 慎朗 准教授

• Faculty of Foreign Language Studies— Associate Professor *Noriaki Tajima*

私たちが日々繰り返すコミュニケーション。それは家族や友人のような近い相手ばかりではなく、時には利害が相反する相手との間にも欠かせない。外国語学部の田島慎朗准教授は、コミュニケーションの手法や影響を分析し、現代社会における人や集団、社会のかわりて生まれる幅広いテーマを扱う学際的なコミュニケーション学の視点で、さまざまな社会的なテーマについて、現代社会での対話や相互理解の可能性を探る。

We communicate with close people like family members and friends in our daily life, but sometimes we also need to communicate with those whose interests conflict with ours. Associate Professor Noriaki Tajima of the Faculty of Foreign Language Studies interrogates public communication, exploring the possibilities of dialogue and mutual understanding in modern society from a communication studies perspective, in order to address a wide range of social themes arising from interactions among individuals, groups, and society.



同僚のアシスタントコーチと、チームのディベーターと
With an assistant coach and a debater



■ Critical, cultural and rhetorical approach to communication

— What sparked your interest in communication studies?

I have loved American literature since high school and continued this love by pursuing an undergraduate degree in English at the Faculty of Foreign Languages at my university. After entering university, I joined the English Speaking Society (ESS), where I joined inter-collegiate English-speaking policy debate club. In the college and debate club, I fell in love with debate and was fascinated by the charm of communication, not only by its methods and impacts but also its challenges and possibilities. I simply enjoyed classes and debate activities back then, but now that I think back on it, I guess I was too competitive.

I majored in American literature as an undergraduate and wrote my thesis focusing on a recurring theme of an American poet. I then went to the United States for graduate school and majored in communication studies. Then, I focused on rhetoric, argumentation, and communication education.

When I was a graduate student, I also served as an graduate teaching assistant, or assistant coach for the debate club, providing guidance and advice to undergraduates. I did this job to take advantage of the university's system that offered tuition waivers and living stipends in exchange for the work. Since returning to Japan, I have taught debate in classes and coordinated Japan-U.S. exchange debate tours with the Japan Debate Association, contributing to the promotion of academic debate.

— What is communication studies?

In the United States, the discipline of communication studies has a clear foundation. It began in the early 20th century when a proposal to analyze political speeches at the then Anglo-American Literary Society was rejected because texts outside of “sophisticated text” were deemed unworthy of academic conversations. This led to the organization of an academic society to establish a new academic field in 1914. This is considered to be the beginning of communication studies in America today. For this reason, from the time it began and until the mid-twentieth century, the field had a strong pragmatic orientation, with undergraduate education that was focused on liberal arts and basic education for students who wanted to go into politics or law. The latter half of the twentieth century has a different story for the discipline. In response to the rapidly increasing globalization of American society, the field expanded to include research and education on communication in a variety of contexts, such as intercultural, organizational, and interpersonal communication as well as media. As a result, many researchers in communication began using quantitative research methods. It has also evolved to include influences from the spread of feminism, civil rights movements, increased discussions on the rights of sexual minorities, as well as the development of ideas and theories in Europe, making contemporary communication studies highly interdisciplinary. The discipline is also characterized by a strong attitude to respond flexibly to insights from other fields of humanities and social sciences.

Because of this history, some people see one of my specialties, rhetoric, as “the orthodox,” connected with the democratic and oratorical culture of ancient Greece and the origin of American communication studies. However, I think of rhetoric more broadly as a humanities discipline that helps us decode communication and gives meaning to our life. When the meanings that are revealed pose ethical dilemmas or stimulate academic debate, I find significant value in my role as a researcher in communication.

■ コミュニケーション学は社会を読み解く人文知

— コミュニケーション学に関心を持ったきっかけを教えてください。

高校生の時からアメリカ文学が好きで、学部も外国語学部英語学科に進みました。大学入学後はESS (English Speaking Society) に入り、そこで大学対抗の英語ディベートに打ち込みました。そのうちに、説得力をもって相手に自身の考えを伝えるために、コミュニケーションの手法や影響だけではなく、コミュニケーション上での課題やそれが持つ可能性に触れ、だんだんとその魅力にのめり込んでいきました。当時は楽しく夢中でやっていましたが、今思い返すと単に負けず嫌いな性格だったのかな、とその時の自分を振り返ります。



▲ディベートキャンプで缶詰めで原稿を書く
26歳当時の田島准教授
When he was writing files at a debate camp (26 years old)



▲大学院時代ディベート大会の受付にて
At reception desk of a debate tournament

学部はアメリカ文学を専攻して、卒業論文はアメリカのある詩人に類するテーマをトピックに書きました。大学院はアメリカ合衆国に渡り、コミュニケーション学を専攻しました。コミュニケーション学の中でも、特にレトリック (修辞学)、弁論術、議論学、スピーチなどの分野を専門にしています。

留学中は大学院生として勉学に励みながら、ディベートクラブのアシスタントコーチとして学部生に指導や助言をする役割を担いました。このような仕事に就くと学費免除や生活費補助がもらえる仕組みを利用しました。帰国後は授業でディベートを教えたり、日本ディベート協会で日米交歓ディベートツアーのコーディネーターを担当し、教育ディベートを普及させる活動にも携わっています。

— コミュニケーション学はどんな学問ですか。

アメリカでのコミュニケーション学は、分野・領域としての成り立ちがかなりはっきりとしています。20世紀当初、当時の英米文学学会の年次集会で政治スピーチを分析しようとした発表が「洗練された文学のテキスト以外は学問の対象として扱うに値しない」という理由で締め出しをされ、1914年に独自の学問領域を切り開こうと学会を組織しました。これが今のアメリカにおけるコミュニケーション学の始まりとされています。そのため、この分野は当初から実利的な側面が強く、20世紀前半ぐらいまでの学部

教育は政界や法界に進みたい学生等を対象としたリベラルアーツ・基礎教育という色合いが強いものでした。20世紀後半には一気にグローバル化が進んだアメリカ社会の動きを受け、異文化や組織内・組織間、対人関係、メディアといったさまざまな場面におけるコミュニケーションを研究の対象や教育のトピックにしていきました。したがって、社会心理学などの定量研究の手法をとる研究者も多くなります。また、フェミニズムや公民権運動の広がり、セクシャルマイノリティの権利の議論の活発化やヨーロッパにおける思想や理論の発達を受け、これらを取り込みながら発展してきました。よって、現在のコミュニケーション学は非常に学際的です。また、他の人文・社会科学分野の知見に柔軟に対応しようという姿勢が強いのも特徴です。

上記のような歴史をもつコミュニケーション学なので、私の専門の一つであるレトリック (修辞学) を「古代ギリシャの直接民主制からつながる討論文化の正統であり、アメリカのコミュニケーション学の起源だ」と理解する人もいます。しかし、私はレトリックをより汎用に、複雑な社会を読み解き、意味を与えてくれる人文知だと考えています。あぶりだされる意味が社会倫理的に問題があるものだったり学術的な議論を活発化するものだったりしたとき、私はコミュニケーション研究者としての意義を強く感じます。

研究最前線



礼節を尊重しながら社会を発展させる

——最近の研究テーマについてお聞かせください。
かねてから、公共で行われる、多数の利害にかかわるコミュニケーションの諸相に興味がありました。最近、世代や考え方が異なる者の間で社会の分断が進む中で、どのように対話を続け、建設的議論を実現していくかに関心があります。話してもムダだから対話することを拒否したり、難しい課題だから解決を諦めてしまったりすることは簡単ですが、公共に関わるものについては、モヤモヤを感じているなら、それを表現しないとイケない。自身の意見を立場の異なる相手とぶつけ合い、一定の合意形成を進めていかなくてはイケないという思いが強くなります。この前提で公共のコミュニケーションを見てみると、この過程を見事に可能にしているものもあれば、それをひどく踏みにじたものもあります。どちらにせよ、この私の思いにかなうものについて、説得の概念や、社会関係・権力の理論を使って、学術的な議論を盛んにしたいと思っています。

最近注目してきた概念に、Civilityというものがあります。Civilityは礼節と訳されることがありますが、けっしてそれだけではありません。この言葉はラテン語の *Civitas* からきていて、古代から人間形成の素養や集団生活のためのスキルというニュアンスがあります。文明 (Civilization) や市民の (Civic) という言葉も同じ語源からきています。日本では礼節がとても重んじられていますが、果たして丁寧な言葉遣いという以上の意味合いがそこにあるでしょうか。もしその要素が欠けているとすれば、Civilityを保ちながら、どのように自身の意見を伝えたいのでしょうか。その好例と思われるものとして、パロディやアート要素をもった社会運動があるのではないかとこの着想で論文「Civility概念の意義：現代日本の社会運動を考えるにあたって」を書きました。

——人々の言説や社会の風潮の変化などはどのように調査するのですか。

こうしたアイデアについて、日本の社会学やメディア学は定量化した分析が多いことは了解しています。私も、こういう論文を面白く拝見します。しかし、この論文において、レトリック研究者、あるいは質的研究者としての私は、新聞報道や政治的な批評のほか、ワイドショーのコメンテーターや街頭インタビューのコメント、

SNSでの発言など関連のありそうな文章をなるべく多く収集し、現代日本の公共で礼節が規範としてどう機能しているのかなどを推論しながら論を進めていくというスタイルをとりました。

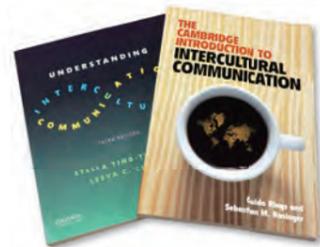
私が研究テーマを選ぶときに大切にしているのは、組織内の対話や社会での公共的な議論をどのように維持・発展していくことが可能なか、という観点です。そこから、例えば、Civilityに焦点を当てて、研究を深めています。日本の社会学者は専門分野を明確に決めてから、その範囲内で取り扱うトピックを絞っていく研究者が多いと思いますが、私はコミュニケーションやレトリックに第一の興味があります。したがって、その時々々の社会のホットなトピックや、興味をそそるコミュニケーション現象を対象にします。社会運動もアート作品も国会論戦もラップも、硬軟に縛られず、研究テーマを選んでいきます。

他者との対話はいつも異文化コミュニケーション

——外国語学部の異文化コミュニケーションプログラムについてご紹介ください。

コミュニケーションでは、相手と同じ場所で同じ時代に育った人であっても、異なる場所・時代で育った人であっても、程度の差はあっても必ず差異を意識させられます。それは一種の異文化とも言えます。異文化とは、自国と他国の文化の差異を指すだけではなく、性別、人種、年齢、性的指向、価値観、身体的能力等のさまざまな要因が複雑に関わるものなのです。その差異を乗り越えて、一緒に歩む方法を考えるか、あるいは少し距離をとると判断するか。また、距離をとるとしても、その判断を自身が納得できるものにしていくか。時に意見がぶつかることもあるでしょうが、その時にどのように対話を重ねて異なった意見や価値観をすり合わせる事が出来るか。このあたりは、若い世代である学生には特に重要な課題だと思います。

外国語学部の学生は2年次にスタディ・アブロードで全員外国での生活を経験します。異文化コミュニケーションプログラムの知見は外国での生活を安全で充実したものにしてくれるでしょう。また、外国生活で得た疑問や課題を、3・4年時に学術的に探究する手法を与えてくれます。そして卒業後には、自分をより良いコミュニケーターにするだけでなく、社会をより良くしていくことにつながりうるものだと信じています。外国語学部での学びを通じて、同胞であっても、外国人であっても、私たち一人ひとりが多層的な文化を生きているという理解で、周囲のものごとやできごとをとらえて、学びを深めていってもらえたらうれしいです。



異文化コミュニケーションの授業で参考にする教科書 ▶
A few sample intercultural communication textbooks

Is it possible to argue while respecting civility?

—— What are your recent research topics?

I have long been interested in the aspects of communication that involve the public and numerous stakeholders. Recently, I have been interested in how we can continue dialogues and realize constructive discussions in the face of growing social divisions across different ideologies and cultures. You may want to refuse or give up discussions because it is very hard to keep dialogue with people with different values or backgrounds. However, when it comes to public topics, topics that concern with everyone in the society, we should express our opinions with good reasons and hear opinions open-mindedly and critically. And ideally, we should reach a conclusion that make sense to all of us. As I search communicative practices from a variety of different scenes, I find some that embody this ideal process. But I also find examples that go awfully wrong. When I find either of these cases, I find it interesting to write academic papers.

Civility is an idea that I found interesting to discuss in the scene of social movements in Japan. It is a manner or communication, but it is not just politeness. As you can find from the word, it is enrooted in the virtue of keeping communication in groups. According to the spirit of the term, you show respect to others not because they are superior, but because you believe it is civil, or because it is an expected in the society of civilization. In other words, it is a virtue for civic society. Usually, in Japan, you are expected to be polite in public. But I am not sure if this polite manner is dedicated to keeping dialogue and debate because you believe it best maintains our civil society. In light of that, how do we express our opinions while maintaining civility? So, I wrote a paper titled "Civility: Mannequin Flash Mob, *Jitaku Keibi Tai*, and the Future of Japanese Democracy," with social movements that make effective use of parody and art serving as good examples to resolve the question I proposed.

—— How do you research your topics?

I understand that sociology and media studies in Japan often adopt quantitative research methods. I also find these papers interesting to read. However, I as a rhetorician and qualitative researcher collect as many relevant texts as possible, including newspaper reports, political critiques, comments from talk show commentators as well as street interviews, and social media posts. Then, I craft my works with ideas and theories of communication, rhetoric or argumentation such as civility.

The choice of my research topics is based on my personal belief that public dialogues and debates should be maintained and developed. The paper on civility and Japanese current social movements is also based on this belief. My speculation is that many researchers in Japan define their areas of specialty from which to choose their individual paper topics. But my primary interest lies in communication and rhetoric, and communication is happening everywhere. So, I target hot topics in society as they occur and compelling communication phenomena. Whether it's social movements, works of art, debates in the national Diet, or rap, I choose my research themes according to my interest.

Dialogue with others is always intercultural communication

—— Please introduce us to the Intercultural Communication Program of the Faculty of Foreign Language Studies.

I believe that our communication is always intercultural, whether you interact with someone close to you or someone raised in a very different place and era. This is because culture is not just made by national boundaries. It involves other complex factors, such as gender, race, age, sexual orientation, values, physical ability, and others. In fact, cultures are multi-layered to make up each individual as being one and only. But when we talk with strangers, cultural difference may appear so deep that we sometimes feel that it is impossible to have good, constructive dialogues. When encountering these dif-



ficulties, do you consider how to overcome them and walk in unison, or do you decide to keep your distance? And when you decide to keep your distance, how do you justify your decision? When we have conflicting opinions, how can we still keep engaging in dialogue and reconcile these differences? I believe trying to find answers to these questions are very important for all of us, especially those in the younger generations as students.

All students in the Faculty of Foreign Language Studies experience life in foreign countries during their second year through the study-abroad program. The insights they learn from the intercultural communication programs will make their life abroad safer and more meaningful. Moreover, it provides them with foundational academic backgrounds for exploring questions and challenges they have encountered during their life abroad in their 3rd and 4th years. And I believe that after graduation, intercultural communication program will not only make them better communicators but also contribute to improving our whole society. By learning through the Faculty of Foreign Language Studies, I hope students will make use our lessons to maximize their potentials in their life as good college students, good workers and as good citizens.



◎ 関西大学協賛の「大阪マラソン2024」開催

関大ランナーやボランティア、約500人が大活躍



2月25日、今年で12回目となる「大阪マラソン2024」(大阪府・大阪市・(公財)大阪陸上競技協会主催)が開催された。

“みんなでかける虹。”をスローガンに、7.2kmを走る「チャレンジラン」や、仲間と一緒にスタートできる「ペア・グループエントリー」、大阪ならではの食材でランナーをもてなす「まいどエイド」などの企画も復活。さらに、今大会は「パリ2024オリンピック競技大会」の日本代表選考レースも兼ねており、エンターテインメント性と競技マラソンの魅力を併せ持つ一大イベントとなった。

当日は小雨が降るあいにくの天気となったが、応募で選出された約3万4千人のランナーが、大阪府庁前を元気にスタート。京セラドーム大阪やあべのハルカスなど大阪の名所をまわり、ゴールの大阪城公園を目指して駆け抜けた。沿道には80万人もの人々が詰めかけ、熱いエールでランナーを激励した。

関西大学は第1回目からオフィシャルスポンサーとして大会運営に協力し、地元「大阪」を盛り上げるためにさまざまな形で参画してきた。今大会は、オリジナルウェアを着用した学生・教職員の関大ランナー40人をはじめ、給水ボランティアとして多くの学生や職員、校友が参加。沿道では「ランナー盛上げ隊!」として、応援団やカイザーズクラブチアダンスチーム、学生チーム漢舞による力強いパフォーマンスが大会に彩りを添えた。

また大会前の23日と24日にはインテックス大阪で「大阪マラソンEXPO 2024」が開催され、関西大学ブースでは、スポーツ・環境生理学を専門とする人間健康学部・河端隆志教授協力のもと、「ランニングフォームクリニック」を実施。河端ゼミの学生・大学院生らと共に、「二軸感覚のランニング・フォームとからだのしくみを考える」をテーマに、人間の構造的特徴に基づいた理想的な走行フォームなどについて解説・アドバイスをした。



◎ 第32回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式を挙

2023年度に活躍した関大アスリートの功績を称えて



3月7日、千里山キャンパスにて、関西大学が誇る偉大なオリンピック・大島鎌吉氏に由来する、第32回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式を挙

式を行った。本学学生個人の部では、アメリカンフットボール部でチャック・ミルズ杯に選出された須田啓太さん(文学部3年次生)、馬術部で第73回全日本学生賞典障害馬術競技大会の障害飛越競技で優勝した漆原竜吉さん(総合情報学部2年次生)、ゴルフ部で関西



大学初の男子プロゴルファーとなった釣浦郁真さん(人間健康学部4年次生)ら12人が受賞。団体の部では、拳法部、馬術部、ヨット部が受賞した。

また、「広く社会的なスポーツ文化の発展に貢献し、顕著な実績を残し、本学と関わりを持つ団体及び個人」では、早瀬万豊さん(体育会野球部前監督)、武田夏実さん(陸上競技部駅伝監督)の2人に同賞を授与した。

JOINT PROGRAM ■ 社会貢献・連携事業 / 地域連携

◎ 社会安全学部・社会安全研究科の学生が「被災高齢者等把握事業」で被災地へ

令和6年能登半島地震 「誰も取り残さない被災者サポートプロジェクト」に参加

2月22日～26日、石川県が実施する被災高齢者等把握事業「誰も取り残さない被災者サポートプログラム」に社会安全研究科の大学院生2人、社会安全学部の学生1人が参加した。

「令和6年能登半島地震」では家屋の倒壊やライフラインの途絶で、相当数の被災者が避難所等での生活を強いられる一方、被害の実態や全体像が把握しづらい状況となっている。この事業は、特に孤立や体調の悪化が懸念される高齢者等の在宅避難世帯を戸別訪問して現在の生活状況や課題を明らかにし、今後の生活再建に必要な施策を検討するための情報を収集するもの。

今回の派遣では訪問調査員が生活する拠点の整備・運営を担うことになった。参加した菅ゼミ三嶋昂将さん(3年次生)は、3月4日から再び珠洲市の拠点に入って活動に参加している。

「現地では聞き取り調査のサポートと拠点のロジを担当しています。講義やゼミからは想像もつかない複雑な状況に、自分が今



まで獲得してきた知見をどのように生かすことができるのか、日々問われています。被災者の方に直接何かできることは少ないですが、生活再建の一助になれば嬉しく思います」

◎第28回先端科学技術シンポジウムを開催

AI時代における最先端の研究成果を披露

1/25・26 ◎第28回先端科学技術シンポジウム



●若山 正人氏
九州大学名誉教授
ZEN大学初代学長就任予定

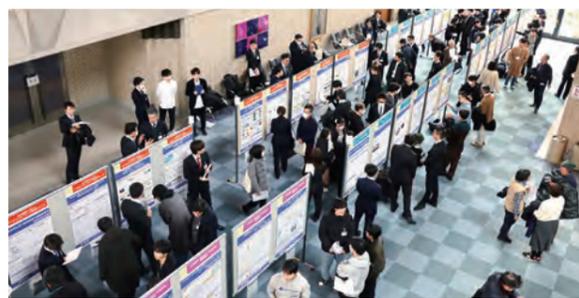


▲若山正人氏による特別講演「AI時代の研究と人材育成」

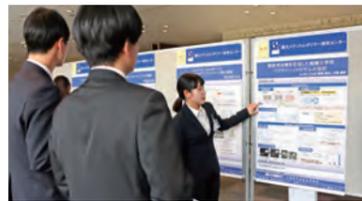
1月25日と26日、第28回先端科学技術シンポジウムが千里山キャンパスで開催された。

本シンポジウムは、関西大学先端科学技術推進機構が展開している多彩な分野の最先端研究成果をとりまとめ、広く社会や企業、産業界へ発表するもの。4年ぶりの対面開催となった今回は、「AI時代の研究と教育」をメインテーマに据え、九州大学名誉教授・ZEN大学初代学長就任予定の若山正人氏による特別講演「AI時代の研究と人材育成」で開幕。興隆が止まらないAIがもたらす利点や懸念事項を取り上げながら、研究や人材育成の分野において、AIと適切に向き合う方法について解説した。

続くテーマ別セッションでは、2日間で17件の招待講演、40件の一般講演、及びポスターセッションで研究内容を紹介。「次世代自動車のトライボトロニクス」「近未来ICTの社会実装」など、多種多様なテーマが取り上げられ、本学をはじめ、他大学や民間企業・研究所、自治体等から参加した約1,000人の研究者らが活発な学術交流を展開し、盛況のうちに終了した。



▲96件の研究テーマが発表されたポスターセッション



◀ポスターセッションで参加者に説明をする学生

同時開催 ▼先端科学技術シンポジウムの併催企画として、医学系研究機関との共同研究成果報告も行われた。

1/25 ◎関西大学・大阪医科薬科大学 医工業連携科学教育研究機構 研究発表会



▲テルモ株式会社 山下恵子氏による招待講演

医学・工学・薬学・看護学の分野を教育面・研究面で融合し、医工業連携科学分野を切り拓く「医工業連携科学教育研究機構」が「企業から見た医工業連携～企業と大学の連携～」をテーマに、テルモ株式会社イノベーションセンターの山下恵子氏による招待講演「新規テーマ創出における医工業連携の役割」をはじめ、「理学療法初学者の臨床推論技術向上を目的とした知識共有基盤の構築に関する研究」「ルテニウムポリピリジル錯体の抗がん活性」など、幅広い内容の研究成果を発表した。

1/26 ◎関大メディカルポリマーシンポジウム

医薬用的高分子材料と医療機器の開発を目指す、関大メディカルポリマー研究センターが、大阪医科薬科大学医学部教授の大須賀慶悟氏による招待講演「血管塞栓物質の現状とアンメットニーズ」をはじめ、「ヒアルロン酸被覆高分子ミセルによる抗線維化薬剤の肝デリバリー」「強いゲルをつくる簡単な方法」など、大阪医科薬科大学との共同研究や医用工学研究への取り組みと成果を発表した。



▲大矢裕一教授の講演

◎関西大学とJAながのが特別なブランドきのこを共同開発

豊かなうま味と栄養が自慢の「豊茸(HOUDAKE)」を販売開始



▲阪急うめだ本店で売り場に立つ西岡ゼミの学生たち
◀関西大学梅田キャンパスで開催された「豊茸(HOUDAKE)」の本格発売開始に関する共同記者発表

関西大学とJAながのは、従来品よりもうま味と栄養価の高い特別なブランドきのこ「豊茸(HOUDAKE)」を共同開発し、阪急百貨店の協力により、1月26日～28日、阪急うめだ本店地下食料品売場で期間限定販売を実施した。

きのこの生産量で全国1位の長野県では、近年きのこ栽培農家の減少が大きな課題となっている。その一因としてあげられるのが、低価格の商品では経営が成り立たないということ。この社会

課題を解決するため、本学商学部の西岡健一教授とJAながのが協働し、付加価値の高い新しいきのこをプロデュースする産学連携プロジェクトを始動。きのこの単価を上げることが生産者減少をくい止める第一歩と考え、

機能性の高いきのこの開発に着手し、約5年の歳月をかけて豊茸(HOUDAKE)ブランドのきのこ2種(ぶなしめじ、えのきたけ)の商品化を実現した。

新ブランドの開発には、うま味成分や栄養成分であるアミノ酸を研究する本学化学学生命工学部の老川典夫教授の研究シーズを活用。脳の高次機能制御や美肌効果などに関係する「D-アミノ酸」を用いた世界的に例のない実験栽培を繰り返し、うま味成分に関わるアミノ酸含有量が従来品の約2倍となるぶなしめじを完成させた。販売価格は一般的なぶなしめじの約3倍で、臭みが少なく、しっかりとした歯応えが特長だ。

また、販売戦略立案には、西岡ゼミの学生たちがブランディングからマーケティング、テスト販売を兼ねた市場調査などに取り組んだ。学生自身も売り場に立って客とコミュニケーションをとり、品質や開発ストーリーを伝えることで、高価格でも抵抗感なく購入されることを確認した。

さらに、阪急うめだ本店での販売に合わせ、本学卒業生の料理コラムニストの山本ゆり氏に豊茸(HOUDAKE)ぶなしめじのレシピ提供を受けるなど、大学ならではの研究力と総合力で商品の魅力を発信。将来的には海外市場も視野に入れ、国際特許の取得に向けた準備も進めている。



▲「豊茸(HOUDAKE)」ぶなしめじ(左)とえのきたけ(右)



料理コラムニスト 山本ゆりさん考案! 「豊茸(HOUDAKE)」レシピ

QRコード: 手軽でおいしいレシピを公開中!

KANDAI NEWS

■ 関大ニュース

SDGsを考えるきっかけに。ギフトで学生を応援



▲前田裕学長(左)からギフトを受け取る学生

12月20日と21日、関西大学ならびに関西大学教育後援会は、「年末学生支援企画」として、抽選で学生500人に食品や日用品等をプレゼントした。

本企画は物価高の影響を受けている学生の応援が目的で、今年で4回目。フードロスの削減を通してSDGsを考えるきっかけになることを願った賞味期限間近の菓子をはじめ、米やツナ缶、豚汁などの食料品、ティッシュや洗剤などの日用品、そして季節物の年越しそばや鏡餅などもセットに加えられた。また、抽選にもれた学生には菓子やミネラルウォーターが配付された。



▲バラエティ豊かな食料品や日用品の数々

第一中学校・第一高等学校の新校舎「景風館」の竣工式を挙行



▲関西大学第一中学校・第一高等学校の新しい学びの空間「景風館」

12月21日、創立110年を迎えた関西大学第一中学校・第一高等学校で、新校舎「景風館」の完成を記念する竣工式が挙行された。

かつての「景風館」の跡地に建てられた新しい学びの空間も「景風館」と命名され、当日は芝井敬司理事長をはじめとする関係者が参列。式後には同館メディアライブラリーにて、記念セレモニーと内覧会も開催された。



記念セレモニーの様子

吹田第一中学校区・豊津中学校区の小・中学生がクラブに1日体験入部



▲バトン・チアリーダー(左)やサッカー(右)のクラブ1日体験を行う参加者



東体育館に集合した豊津中学校区の参加者たち

地域教育協議会とスポーツ振興グループの連携による1日体験入部が千里山キャンパスで開催され、12月17日に吹田第一中学校区で約200人、1月21日に豊津中学校区で約160人の小・中学生が参加した。

各日、小・中学生たちは体験入部を希望するクラブに分かれ、各クラブがそれぞれ考えた練習メニューを体験。約90分にわたり、大学生と触れ合いながら和気あいあいとスポーツや演奏を楽しんだ。また、終了後には、東体育館メインアリーナにて応援団による演舞演奏が行われ、その迫力に引率の教職員や保護者も目を奪われていた。

飛沫防止用アクリル板がフォトスタンドに生まれ変わる コロナ禍に入学した卒業生の卒業記念品に

関西大学と関西大学教育後援会は、2024年3月卒業の大学生・大学院生約7,000人を対象に、学内で使用していた飛沫防止用アクリル板パーテーションを再利用したフォトスタンドを製作し、卒業式に記念品としてプレゼントした。

今春の卒業生は、コロナ禍での入学となり、貴重な大学生活をさまざまな制約の中で過ごした。フォトスタンドには、「密を避けつつ仲間と築いた絆を目に見える形で残してほしい」「卒業式では仲間や家族、お世話になった方々と笑顔で写真を撮ってもらいたい」「SDGsへの関心を持ち続けてほしい」などの願いが込められている。



▲記念品には擬人化されたアクリル板からのメッセージカードも添えられた

KANSAI UNIVERSITY SOCIAL MEDIA

